

## 2010 年度共同利用・共同研究課題申請書（新規）

申請者(主査)： 吳人徳司

1. 共同利用・共同研究課題名	
和文	北方諸言語の類型論的比較研究
英文	Comparative Study on the Languages of the North from Typological Perspective
2. 研究期間	22 年度～24 年度 (3 年間計画)
3. 共同利用・	(氏名) 吳人徳司 (役割分担) 主査, 成果取りまとめの責任者, チュクチ語、モンゴル諸語
(同上)	(氏名) 渡辺 己 (役割分担) 副査, 成果刊行物編集, セイリッシュ語
(同上)	(氏名) 中山 俊秀 (役割分担) 副査, 成果刊行物編集, ワカシ語諸言語 (氏名) 塩原朝子 (役割分担) 成果刊行物編集, インドネシア諸語 (氏名) 荒川慎太郎 (役割分担) 成果刊行物編集, 西夏語学
4. 共同研究員採択数	20 名
5. 共同研究員に求	本研究による研究会、国際シンポジウムに参加するとともに、専門とする各言語に関する研究成果を本研究により刊行予定の論文集 <i>Linguistic Typology of the North</i> に寄稿する。
6. 共同利用・共同研究課題の概要 (400 字程度) (※要覧等広報の際にも利用・掲載します。)	
<p>本研究では、北東シベリアから北米にかけて分布する諸言語（以下、北方諸言語）の様々な文法現象に関する類型論的比較研究をおこなう。人類の移動のルートにあたるこの地域は、類型・系統を異にする言語の蝟集が世界的に見ても突出した地域として注目されている。それらの言語が示す類型的多様性は、語形成手段、文法関係の標示、語順、文法範疇など、形態論から統語論へと多岐にわたる。従来、北東アジアと北米では別個に研究が進められてきたが、これらの文法現象の中には大陸の新旧を越えた類似性を示すものもあり、両地域を総合的に捉える視点が重要である。</p> <p>本研究では、以下のような研究を行なっていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国内外の北方諸言語研究者の協力体制により、海外研究者にも協力を呼びかけ国際的な北方諸言語の類型論的研究を構築することを目指す。</li> <li>2. 本別教育研究経費「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト (LingDy)」とも連携し、北方諸言語の記述の前提である言語データの加工と公開に取り組む。</li> </ol>	
7. 研究の目的 (400 字程度)	
<p>本研究では、北方諸言語の様々な文法現象を対象にするが、中でも特に、参加メンバーがこれまで力を入れてきた語の統合度・粘着度、語形成手段、帰属の不明確な形容詞をはじめとする品詞の画定といった形態論上の諸問題、格標示、結合価、ヴォイス、連体修飾構造といった統語論上の諸問題を、大陸の新旧という枠組みを越えて広範かつ詳細に比較検討する。これにより、北方諸言語の類型論的特殊性と普遍性を探っていく。さらに、これらの文法現象は、いずれも北方諸言語においては大きな振り幅を示す一方で、大陸をまたいで類似を示すこともある。本研究ではそれらの事実の背景にある言語類型論上の諸問題、言語変化のメカニズムの問題、言語接触による言語の伝播的影響や言語混淆を生み出すメカニズムの問題の解明などをも視野に含め研究を進める。</p>	

<b>8. 研究の意義、特に共同利用・共同研究として展開することの意義（400字程度）</b>
<p>言語学の最近の傾向として、共同研究が可能な基盤Aあるいは基盤Bといった中型の科研費の獲得が難しくなりつつことからこれを避け、基盤Cの申請に傾く傾向が見られる。これは、研究の個別化・孤立化を招く危険性をはらんでいる。北方諸言語研究に関しても、現在、語族を越えた共同研究がほとんどおこなわれなくなっている。これに対し、本研究所での共同研究は、研究者間のより広範な連携を可能にし、研究の孤立化を回避するためにきわめて重要な機能を果たしうると考えられる。</p>
<b>9. 共同利用・共同研究として期待される研究成果、および共同利用・共同研究効果（400字程度）</b>
<p>北東アジアならびに北米の諸言語を対象にした類型論的比較研究は、国内では主に1990年代の前半から北海道大学を中心に始められたが、その後、諸所の事情により両地域をカバーする比較研究は中断された形になっている。しかし、そのなかでも、当時に比べれば、両地域の研究対象となる諸言語の数、文法記述の蓄積とも着実かつ飛躍的に増大しつつある。その一方で、言語類型論の理論の精緻化も進んでいる。これらの研究成果を共有することにより、新たに北東アジア、北米両地域の諸言語の比較研究が可能になれば、北方諸言語研究が新展開を見せるだけでなく、言語類型論が取り組む諸問題の解明にも寄与しうるのであることが期待される。</p>
<b>10. 研究の実施計画（800字程度）</b>
<p>本研究は、平成22年度から24年度まで3年計画で進められるが、各年度の活動計画は以下のとおり。</p> <p>平成22年度：国内のメンバーを中心に2回の研究会を開催する。その結果を受けて、次年度に開催予定の国際シンポジウムのテーマの絞り込みならびに内容について検討する。</p> <p>平成23年度：国内のメンバーを中心に1回の研究会を開催するとともに、北方諸言語の類型論的研究に関する国際シンポを開催する。シンポジウムには、マックス・プランク研究所のWALS編集者であるHaspelmath氏、エヴェン語の専門家Malchukov氏、北東アジア・北米両地域の諸言語に精通するFortescue氏（コペンハーゲン大学）らを招聘する予定である。</p> <p>平成24年度：国内のメンバーを中心に2回の研究会を開催する。年度末には、シンポジウムの報告書ならびに3年間の研究成果を纏めた論文集 <i>Linguistic Typology of the North</i>（英文）を刊行する。</p>
<b>11. 研究成果の公開計画（200字程度）</b>
<p>本研究が終了する平成24年度には、3年間の研究成果を論文集 <i>Linguistic Typology of the North</i> として刊行予定である。</p> <p>さらに、2年目に開催されたシンポジウムの報告書（英文）も刊行する。</p>
<b>12. 応募者に求める提出書類</b>
<p>本研究課題に関する関心について自由作文（200字）</p>